

● はじめに

ポートランド・プラン（以下、「プラン」で表記）は、2012年4月に市議会により採択された、将来の市の繁栄に繋がるための総合的戦略計画である。今回は、プランにおける市民参加の手法・考え方等について学んだ中から、気付いた点、教わった点等について感じたことを記したい。

● 研修で気付いたこと、教わったこと等

プランは、日本でいう「総合計画（もしくは総合振興計画）」に該当するものである。今回、話の焦点となったのが、いわゆる「マイノリティーな人たち」に対する市民参加のあり方であった。昔は、ネイバーフッド・アソシエーション（以下、「NA」で表記。日本で言う「自治会・町内会」）を経由して市民参加を行い、計画を策定する手法が一般的であり、これだけで十分な市民参加を図ることが出来ていた。しかし、現在は移民が増えたことで文化的に多様な住民の層が広がり、また、貧富の差が拡大するなどの環境変化があったことから、NAに含まれない住民たちに対して、どのようにアウトプットしていくのが大きな検討課題になっている。

この話を聞いた時、「日本も状況は同じだ。」ということ強く感じた。日本における総合計画策定作業も自治会などの地域組織を巻き込んだ形が一般的であり、マイノリティーな人たちやサイレント・マジョリティと呼ばれる「声なき住民」の市民参加はほとんど行われていないのが現状である（なお、吉川市の「第5次吉川市総合振興計画」策定については、無作為抽出による市民参加手法である「プラーヌン・クスツェレ」を初めて導入し、これまで市民参加をしてこなかった市民にスポットライトを当てることに成功した。ただし、予算の都合等もあり、市民参加の機会が限定されてしまった部分があり、最後まで市民参加が徹底されなかったのは課題であったと認識している）。

では、ポートランドと日本では何が違うのだろうか。その答えは、「市民参加に対する行政の姿勢の違い」であったように思う。ポートランドでは、NAに含まれない人たちのリーダーと繋がることから市民参加をスタートさせている。そして、団体に対し、意思決定の関わり方などの市民参加の手法をトレーニングさせ、団体ごとに「どうすれば市民参加できるのか。」について考えてもらう時間を設けたのである。

また、お話をしてくださったデボラさんからは「今まで市職員は地域のエキスパートであると思っていたが、実はそうではなかったことに気付いた。」というコメントがあり、自らの失敗談を語っていただいた。自分たちの失敗や勘違いを人に言える「勇気」。まさにこれが行政の強い姿勢と覚悟であったように思う。

さらに、デボラさんは、「人間関係の構築と維持」が最も重要であり、これを積み重ねることで行政が市民から信頼されることに繋がるとおっしゃっている。これからは、多様な市民の方と直接対話し、情報提供を徹底させることが必要な時代であり、また、言いやすい大人だけではなく、無関心層や子どもなどの若年層など全ての年齢層から声を聞くことが大切であると思った。

● おわりに

お話いただいた内容を整理してみると、話し合いをしているのは日本もポートランドも同じである

ことがわかった。ただし、日本はどちらかと言うと「後出しジャンケン」の様相が強く、常に「勝ち負け」を決めたがる傾向が強いと感じた（その場合、得てしてお金を握っている行政が強い存在になる）。一方、ポートランドは「市民とパートナーになる」という意識がとても強いように思う。おそらく日本にも地域に沢山のリーダーがいるはずだが、日本の行政はそれを煙たがり、蹴落としてしまっているのではないだろうか。

資源が限られてきている現代において、日本もアメリカも従来の「資金を投じる手法」から「クリエイティブな手法」にチェンジしている最中にある（もしくは模索している）と感じる。市民参加については、まだ経験値が足りないことは否めないが、この壁を乗り越えるため、①コミュニケーションの充実、②勝ち負けの関係ではなく、パートナーの関係になる、③可視化してものごとを考える、④ピアストーミング（一緒に飲んで本音で語り合う）などの手法等を積極的に取り入れながら、市民と共にまちを作り上げていく機運を醸成させる必要があると考える。そして、自分にとっては、今ある立場から考えられるリーダーシップを取って、市民と一緒に歩んでいきたいと思う。

